

二本松泰子 『鷹書と鷹術流派の系譜』（三弥井書店、
2018年）

三保，忠夫
神戸女子大学：名誉教授

<https://doi.org/10.15017/2236366>

出版情報：鷹・鷹場・環境研究. 3, pp.133-136, 2019-03-22. Faculty of Arts and Science, Kyushu University
バージョン：
権利関係：



<書評>

二本松泰子『鷹書と鷹術流派の系譜』

(三弥井書店、2018年)

三保 忠夫
MIHO, Tadao

1. 本書の構成

本書は、伝承文学研究の立場から、鷹書を取り上げ、鷹術の流派を考える。まず、その目次の編・章を転載し、本書の概要を示す。

序章 中近世の放鷹文化—鷹書と鷹術流派—

第一編 鷹術流派の成立

第一章 信仰由来の流派の成立—京都諏訪氏の鷹書—

第二章 祢津流宗家の鷹術—祢津志摩の鷹書—

第二編 鷹術流派の系譜

第一章 祢津流の伝播の実相—依田氏の鷹書群—

第二章 祢津流の鷹術伝承—依田盛昌の鷹書—

第三章 祢津流の祢津神平説話

付論 盛昌本『祢津意趣 乾』(依田盛敬氏蔵書)について

第三編 鷹術流派の展開

第一章 派生した祢津流の鷹術伝承—依田氏伝来の犬牽の伝書をめぐって—

第二章 祢津流の鷹書と依田氏の鷹術伝承—交錯する鷹術の故実伝承—

付・依田氏所蔵鷹書書誌一覧

第四編 鷹匠と乖離した流派・無流派の鷹匠

第一章 礼法家による鷹術流派の創作—小笠原流の鷹書—

第二章 鷹匠の文事—松本藩の鷹匠・外山氏を事例として—

補論 朝鮮放鷹文化享受の一斑

—韓国国立中央図書館蔵『古本鷹鶴方』の伝来をめぐって—

結語

初出一覧

あとがき

索引

2. 編、章の主旨

全編、「鷹書」を読み込み、丁寧な構成となっている。著者の、「鷹書」を愛する気持ちがよく分かる著書である。

「序章」において、「本書の目的」が述べられる。すなわち、「…わが国の鷹狩りは、中世～近世において、もっぱら武家のたしなむ「技芸」として扱われ、一種の礼法とみなされた」、「このような鷹狩りの実態を伴う放鷹文化に注目する立場から、中世以降の鷹術の主流を担った武家流の鷹術流派を考察の対象とする」、その具体的な手段として、「流派独自の鷹術伝承や秘伝を記載し、そのアイデンティティを構築する媒体として利用されていたテキストを取り上げて、その内容や伝来の実相について検証してゆく」とする。

これは、これで大切なことである。大いに追及してほしい。中世末から近世にかけて、「流派」なるもの、そして、その独自なるものが主張された。その主導者を明かし、導くところをえぐり出すのである。ここには、もはや、武家しかいない。領地を持たない公家など、いないに等しい。その武家のたしなむ「技芸」の一つに「鷹術」があった。

しかし、一方、そもそも、この期、なぜ、他者との差異を説くのか、なぜ、「流派」を主張するに至るのか、はたまた、なぜ、「礼法」化して行くのか、この点が問われる。“鷹遣い”といっても、中世～江戸期のそれは、多く天下人、あるいは、藩主層のための雇われ人(御鷹方)であった。この点、往時の惟喬親王や業平のような自主性、奔放性はみられず、主体性に欠ける。

また、これとも関わるが、「放鷹文化」は、中世前にもあったというべきではないか。古墳時代から奈良・平安時代、……と、それぞれに「放鷹文化」はあったとみられる。ただ、放鷹は“実践”的な存在であって、「鷹書」という“文字化”や「礼法」化はいまだしかなかったかもしれない。ある意味では、「鷹書」や「礼法書」こそ、非“実践”的な存在であって、これらの有無が、「文化」の有無とパラレルということはない。以下にも通ずることである。

なお、「鷹術の流派」につき、「公家の流派については、いずれもその実態は確認できない。」(p.2)とする。これは言い過ぎではあるまいか。あるいは、この「実態」なることばに問題がある。例えば、『龍山公鷹百首』には「当流」という言葉とともに、「又田舎の小笠原流諏方 事外かはりたる事数多あり、…諏方流^(ママ)当流かわりめ有之」、「但他流の説多しといへども、当流には不用之」と見える(他例略)¹。当書の場合、鷹書におけるような条項は用いず、教え歌と左注で示すが、「小笠原流」「諏方(訪)流」と「当流」とが比較されている。龍山(生歿、天文5年～慶長17年)は、俗名前久といい、従一位関白・太政大臣を務め、長尾景虎・足利義昭・織田信長らとも

交流をもつ。当『鷹百首』は、豊臣秀吉・徳川家康らの懇望によって執筆されたといい、「近衛流」とでもいべき龍山の主張するところが認められる。龍山以前の“実践”もあるかもしれない。

さて、「序章」の以下には、中世末～近世の仙台藩広田宗綱の鷹術を例とし、「本章以降においては、この宗綱の広田流のような、鷹書を基盤として構築され、伝播していった鷹術流派について検討してゆく」(p.18)とする。

宗綱は、貞山様(伊達政宗)から一字を賜ったほどの人物で、残された鷹書も少々の数ではない。同藩御鷹方よりも上の御役に就いていたようだが、その鷹術が何人の、何流を継承するものか、詳しく知りたいところである。

「第一編」は、中近世期における武家流の鷹術流派の成立について述べる。すなわち、「第一章」に、天理大学附属天理図書館蔵『鷹聞書少々』、永青文庫蔵『和伝鷹経 上下』をもって、室町幕府の奉行人諏訪貞通の鷹術を取り上げる。

次いで、「第二章」に、近世期の将軍家所縁鷹術として隆盛した祢津家宗家の鷹術を取り上げる。

京都諏訪社の神職を務めた諏訪貞通の鷹書は、六代の祖小坂円忠(幕府公事奉行人、『諏訪大明神絵詞』発願)を慕うものの、「諏訪流」にないこと、また、祢津神平貞直と諏訪信仰とを結び付けたのは、「京都諏訪氏」の系統であることを説く。

「第二編」は、中近世期における武家流の鷹術の系譜をたどる。その「第一章」に、依田守広の一族と依田氏伝来の鷹書群、「第二章」に、依田盛昌(守広の末裔、もと富山藩、のち加賀藩)の鷹書・鷹術、「第三章」に、依田氏の鷹書を手掛りに「祢津神平貞直」の“鷹術説話”を検討する。

確かに、「祢津流の流派」は著名であり、武家の間で隆盛した。しかし、その伝播の実態はほとんど分からなかった。その主因は、諏訪流との混同にあり、また、情報不足にあるとする。祢津神平の「史実」(p.45)、また、“諏訪流”の実態について知るのは困難を伴う。

「付論」として、上記の依田盛昌本『祢津意趣

乾』の「祢津神平貞直説話」を整理する。

「第三編」は、近世期における武家流の鷹術流派の展開を説く。その「第一章」には、依田盛敬氏の所蔵される「依田氏の犬(獺)牽」の伝書の性格について言及する。すなわち、その内の『祢津家獺之秘書』は、「祢津家」と関わりなく、しかも、あちこち「依田氏伝来の鷹書類話と符号する」ことが確認でき、「他流派の鷹書はもとより、依田氏以外に伝来した祢津流の鷹書では確認できない独自の内容といえるものがある」という。また、同じく『獺請取渡シ之ノ巻』に見える説話も、依田家に伝来する「鷹書」記載の説話を簡略にして作り替え、「犬牽」の伝書としたものとされる。著者は、依田氏が「祢津家」の名を借り、「鷹書」から「犬牽書」を作り出さねばならなかった理由も推測するが、その着眼点の細かさには驚嘆の他ない。加賀藩ほどの大身となれば、その御鷹方の構成、御鷹部屋の構え、身分・俸給、その他、多くの関連事象も問われる。関係資料も残っていようから、折を見て整理していただきたい。

なお、江戸時代には、別に犬飼・犬牽がいて犬を遣っていた。『令義解』に「鷹犬」とあり、西園寺公経公作という『鷹百首』にも、ふつうに犬がみえるが、宇多上皇が催した昌泰元(898)年10月20日の片野の「競狩」²には「犬」が見えないようである。朝鮮の鷹狩りでは、犬を遣うことなく鳥を取っているという(昭和6年統計)³。

「第二章」は、祢津氏鷹書・依田氏鷹書、双方に交錯する言説について分析する。すなわち、依田盛敬氏蔵『白鷹記 四』を手掛かりに、家元ともいうべき祢津流伝承の鷹術と、同流と称する依田氏の所説との間に相異がある、これは「鷹書」というものによって“説く”ところが変容し、あるいは、生み出されたものではないかという。

「付」として、「依田氏所蔵鷹書書誌一覧」を掲載する。地方に眠る古書は、善良な発掘者を待っている。大いに発掘し、後世に知らしめてほしい。

依田家の“系図”については、周囲の承諾が得られるならば、一度、古文書学の方から専門的な

分析を必要としよう。

「第四編」は、やや、熟さない標題だが、「第一章」は、重要な指摘となっている。すなわち、武家流礼法家として知られる小笠原流、その中でも目覚ましい活躍をした水嶋派の「小笠原流の鷹書」につき、宮内庁書陵部所蔵『小笠原家 鷹方委被伝授 全』と書名あるもの(奥書に小笠原長時や水嶋ト也等の名あり)、かつ、これと記事の重なる同『啓蒙集 絵図之部』・同『啓蒙集 鳥柴附』を検討すれば、これらは小笠原流・水嶋派と関わりないもの、それどころか、鷹狩の「実態」を伴わないものであることを確認した。あわせて、その『啓蒙集』等は、祢津宗光(『柳庵雑筆』第二の説)でなく、大宮新蔵人宗勝の教えを記したものであると述べる。鷹狩の現場から遊離した“礼法家”の登場するのも、家塾・私塾の充実した時代ならでのことであろうか。

「第二章」では、外山好賢(信州松本藩水野家、ついで松本藩戸田家に仕える)の“文事”について述べる。章立てに「鷹匠の文事」とするほど、文事の人らしくないが、著者の気持ちは分かる。

また、あわせて、好賢の蒐集した鷹匠文書にみえる「吉良流」の鷹書は、近世期に流行した「実在しない鷹術流派を称する捏造されたテキスト」の一種であったという。吉良氏の場合も、室町幕府の“儀礼文化”をもって江戸幕府に食い込んでいった名門氏族であった。

本章には、外山好賢一族の残した鷹書関連文書のリストが付されている。これも後人を益するところが大きい。文書は四散を免がれ、いずれにも「松本市立博物館所蔵資料印」(正方印)、「松本市立博物館書蔵資料」(長方印)の捺印がある。その素性・由来を調べる上でも都合が良い。

「補論」は、朝鮮撰述『古本鷹鶻方』の諸本について言及する。

3. むすび

著者は、「説話」といい、「伝承」という。だが、

文献資料を尊重し、その翻字も注意深い。その中で、広田宗綱、祢津神平貞直、依田守広、依田盛昌らの実像に迫り、京都諏訪氏、また、依田氏犬牽由来譚、依田氏伝来『白鷹記』、水嶋派の小笠原流鷹書、外山好賢文書、吉良流鷹書等々の実態を明らかにした。新説も多い。評価されてよい。

ただ、「鷹書」は、“成長”するもの、という視点も必要ではなからうか。あるいは、当初の“流祖”が独創性というものを望んだか否か、“流祖”に足りないものを“後人”が補う、補って成長し続けられればよい、ということもあったかもしれない。

“文献”と“史実”とのほざまにも注意したい。前者、——ことに“身上書”のたぐいは、自薦のための自己申告書であって、事実も虚偽もある。そのいずれにあっても、それぞれに意味がある。伝承文学は、それをテーマの一つとするのであるが、ここに“事実”を置かねば、そのいずれであるかも判別できない。また、“事実”の持つ意味は、時代と共に推移する。かつ、得てして、文字になって残っているのは、“常態ではない”方であることにも留意したい。

「鷹書」類に見える伝承や人名、地名などには未詳の問題も多い。この種の研究は、古い割には深く掘り下げることがなく、横の連携も乏しかった。それは、「鷹書」は一部の人の使用に限られ、従事する人が少なかったからではなからうか。

“鷹ことば”、また、“犬ことば”などの語彙調査もいまだしい。筆者も、つい先には鷹書にみえる「ねこづら時」の意味が分からず、未勘としてしまった⁴。ところが、伊勢流『貞丈雑記』⁵によれば、竹田流『小的の書』や『弓馬故実』に言及があるといい、坪井栄の作品にも「なんのいわれか、ねこづら時といわれる夕ぐれの浜べに」⁶云々と見える。これでは、折角の“鷹ことば”も理解できず、“日本語資料”も活かさない。「国語辞書」類の充実しないのも、先々、困る。まず、「鷹書」をあるがままに信じ、この上に「弓馬」の書、さらには「犬牽」、関連しては「犬追物」、あるいは、現代地方語（方言）諸書に当たる必要

がある。

前途は遼遠である。著者には一層の研究心をもって私どもを啓蒙していただきたい。

なお、「鷹書」と「仏教」との関係が問われる。本書の冒頭には『鷹書才覚卷抄出』（著者架蔵）が引かれ、「一鷹つかひ出しの系図之事」（傍訓ママ）以下、「不動・普賢・毘沙門・観音」など、四仏を持ち出し、「まかた国の王」といい、「彼国にては鷹をくちと云」と傍記する（p.8。「仁徳紀」に「俱知」と見えるのは漢語「鶻」^{コヅ}か）。後にも「鷹や鷹匠にまつわる仏教の教義に関連した文言が記載…」（p.221）云々とあり、一方、「寺院縁起らしき殺生の戒め」（p.76）との発言も見られる。異質の「仏教」を取り込まなければならなかった問題を考え、“鷹書に取り込まれた仏教文化”、また、「流派」それぞれの“取り込み方”について考えたい。

末尾ながら、『祢津家猿之秘書』の奥に「延宝二甲子年」（p.204,1.8）とあるのは、年号か干支かに誤記がありはしないか。また、何の注記もなく（p.68の図版、p.105の系図を除く）、「（祢津）松鶴軒」（p.62,67,92,100,109,112,118など）・「（祢津）松鶻軒」（p.19,20,83,91,92など）、「水嶋派」（p.286,288など）・「水島派」（p.288）と見えることがある。本書にとっては大事な言葉である。読者、また、引用者のため、然るべき配慮を御願いたい。

註

¹ 小著『鷹書の研究 宮内庁書陵部蔵本を中心に（上冊）』（和泉書院、2016年）1922頁。

² 小著『鷹狩と王朝文学』（吉川弘文館、2018年）54頁。

³ 福井久蔵「鷹詞に就きて」（『言語研究』6、1940年）2頁。

⁴ 小稿「鷹山の言葉（鷹狩言葉）について—宮内庁書陵部所蔵鷹書・鷹詞の研究—」（『神女大國文』27、2016年）92頁。

⁵ 島田勇雄校注『貞丈雑記3』（平凡社、1985年）310頁。

⁶ 坪井栄著『母のない子と子のない母と。』^(ママ)（光文社、1953年）227頁。